

ホーム

聖書を読む

聖書を知る

聖書のお求め

献金する

聖書協会とは

聖書図書館

ホーム > 聖書を知る > 日本聖書協会 講演会 原文の味・訳文の味 01

聖書を知る



- [聖書とは](#)
- [聖書翻訳の研究](#)
- [聖書ができるまで](#)
- [聖書翻訳の歴史](#)
- [口語訳、新共同訳、聖書協会共同訳 について](#)
- [新翻訳事業について](#)

新翻訳事業について

日本聖書協会 講演会
原文の味・訳文の味



梶 暁生氏

2015年3月6日

於・フクラシア東京ステーション

はじめに

「料理」は「足し算」、「翻訳」は「引き算」?!

「どんな翻訳になるのですか?—新しい聖書の特徴Ⅱ—」というタイトルのもと、本日は「原文の味・訳文の味」と題してお話しさせていただきます。「翻訳の味」でなく、「訳文の味」としましたのは、今日の話は翻訳作業の途中経過のことですので、まだ翻訳を「味わう」というまでには至らず、訳文の「味を見る」という理由によるものです。

「料理は足し算」という言葉がありますが、「翻訳は引き算」—足し算の要素もありますが—とでも言っているのではないかと思います。大事なのは、どちらも慎重にひとつひとつ丁寧に吟味して、全体の調和を考えながら仕事をすすめるということでしょう。料理は足し算をしていって旨味を引き出し、翻訳はどちらかと言うと引き算をしていって意味を引き出すのではないかと考えられます。

ということで、本日は「どんな翻訳になるのですか」の「なる」までの途中で、翻訳には「ならない」で切り捨てられてしまう、そういった作業の過程のことが主な話になります。ただ最初は、聖書翻訳作業の途中で、訳文の単語の語順がおかしいのではないかと指摘がありましたので、それに対する語順の問題から始め、つづいて語数の問題、語彙の問題について話をすすめていただきます。最後に、新しい聖書の翻訳では、「本文注」付きの聖書も作成されますので、それについて少し解説をいたします。「本文注」は、翻訳の本文では出すことのできないことについての補足説明となっています。

前のページへ

1

2

3

4

5

6

7

8

9

次のページへ

■このページに関するお問合せは

ホーム

聖書を読む

聖書を知る

聖書のお求め

献金する

聖書協会とは

聖書図書館

ホーム > 聖書を知る > 日本聖書協会 講演会 原文の味・訳文の味 02

聖書を知る



- [聖書とは](#)
- [聖書翻訳の研究](#)
- [聖書ができるまで](#)
- [聖書翻訳の歴史](#)
- [口語訳、新共同訳、聖書協会共同訳 について](#)
- [新翻訳事業について](#)

新翻訳事業について

日本聖書協会 講演会
原文の味・訳文の味

梶 暁生氏

2015年3月6日

於・フクラシア東京ステーション

I 語順の問題

言語によって語順は違いますので、訳文においては語順を入れ替えたりして、日本語として自然な語順に直すのが適切であると思われます。ただ、原文の特徴的な表現方法を生かすために、日本語としては少し奇異に感じられることもあります。その語順どおりに訳するのがいいのではないかと考えられる箇所もあります。以下、いくつかの例を取り出してお話いたします。

(1) キアスムス (交差並行法) (創世記2章4節)

創世記2章4節の前半は「これが天と地の創造の由来である。」のに対し、後半は「主なる神が地と天を造られたとき、」となっています。

「これが天と地の創造の由来である。」(4節前半) 天と地 AとB
「主なる神が地と天を造られたとき、」(4節後半) 地と天 B'とA'

前半が「天と地」であるのに対し、後半は「地と天」となっています。「AとB」と「B'とA'」を上下にならべ、AとA'、BとB'を結びつけて線を書きますと、Xの字ができあがります。Xはギリシア語でキーと呼ばれますので、こうした文芸的な技法はキアスムス(交差並行法)と名づけられています。聖書にはこのキアスムスが多く出てきます。

創世記2章4節の前半は、創世記1章1節からはじまる天地創造の7日間の物語のしめくりで、後半は2章25節までのもうひとつの天地創造の物語のはじまりです。元来は異なる別々の天地創造の記事がつなぎ合わせられたもので、ひとつに合わせられた時、後半はおそらく元来は「天と地」であったのを「地と天」として、前半の「天と地」と結びつけたと考えられます。交差配列法は聖書の特徴的な表現の方法でありますので、日本語でよほど奇異に感じられない限り、原文通りに訳するのが適切でしょう。アラビア語の挨拶でもこのキアスムスが用いられており、これは中近東の伝統的な表現の方法であることがわかります。

「アッサラーム・アレイクム(平和が・あなたに[ありますように])」

「ワ・アレイクム・サラーム(あなたに[ありますように]・平和が)

日本語では、こうした文芸的な技法はあまりなじみのないものですが、それでもないことはありません。以下のような『正法眼蔵』の語句の例もあります。

「耳をかるくすることなかれ、目をもくすることなかれ。

「目をもくすることなかれ、耳をかるくすることなかれ。」(「座禅箴」道元)



■このページに関するお問合せは

一般財団法人 日本聖書協会 翻訳部

〒 104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1

TEL.03-3567-1989 FAX.03-3567-4436 E-mail. transl@bible.or.jp

[ページの先頭に戻る ▲](#)

[▶ご利用規約](#) [▶プライバシーの保護について](#) [▶このサイトに関するお問い合わせ](#)

1997-2021 © Japan Bible Society, Allrights reserved. 当サイトに掲載されている情報の無断転載を禁止します。

ホーム

聖書を読む

聖書を知る

聖書のお求め

献金する

聖書協会とは

聖書図書館

ホーム > 聖書を知る > 日本聖書協会 講演会 原文の味・訳文の味 03

聖書を知る



- [聖書とは](#)
- [聖書翻訳の研究](#)
- [聖書ができるまで](#)
- [聖書翻訳の歴史](#)
- [口語訳、新共同訳、聖書協会共同訳 について](#)
- [新翻訳事業について](#)

新翻訳事業について

日本聖書協会 講演会 原文の味・訳文の味



梶 暁生氏

2015年3月6日

於・フクラシア東京ステーション

(2) 方位（申命記3章27節）

「ピスガの頂上に登り、東西南北を見渡すのだ。」(新共同訳)

「ピスガの頂に登り、目をあげて西、北、南、東を望み見よ。」(口語訳)

四つの方位をまとめて、日本語では「東西南北」、中国語では「東南西北」、英語では「北南東西」と言われます。しかしながら、聖書でこの四つの方位が一緒に出てくる場合、その順序を無視して熟語として訳してしまえば、原文が述べようとしている的確な意味を見失う場合があります。

申命記3章23-29節の中に、モーセと神との対話があり、そこで四つの方位が出てきます。「どうか、わたしにも渡って行かせ、ヨルダン川の向こうの良い土地、美しい山、またレバノン山を見せてください。しかし主は、あなたたちのゆえにわたしに向かって憤り、祈りを聞こうとされなかった。主はわたしに言われた。『もうよい。この事を二度と口にしてはならない。ピスガの頂上に登り、東西南北を見渡すのだ。お前はこのヨルダン川を渡って行けないのだから、自分の目でよく見ておくがよい。ヨシヤを任務に就け、彼を力づけ、励ましなさい。彼はこの民の先頭に立って、お前が今見ている土地を、彼らに受け継がせるであろう。』」(新共同訳)

ここで神はモーセに対して、ヨルダン川の東側にあるピスガの山頂から見渡すことを言われます。まず最初に、約束の地があるヨルダン川の西(海)に目を向けるようにと言われ、次に北、そして南、最後に東と続けられます。最初に見るのは、何よりもこれから入ってゆくであろう約束の地の西なのです。ですからここはやはり原文通り「西北南東」と訳するのが妥当であるでしょう。

(3) 金銀（詩編115:4）

「国々の偶像は金銀にすぎず 人間の手が造ったもの。」(新共同訳)

「彼らの偶像はしろがねと、こがねで、人の手のわざである。」(口語訳)

日本語ではふつう「金と銀」あるいは「金銀」という順で言いますが、旧約聖書の原文では、「金と銀」の順もありますが、「銀と金」の順が多くあります。

詩115:4は原文では、「銀と金」の順で、「金と銀」の順ではありません。オリンピックのメダルが金銀銅であるように、最初に来るのはふつうその価値からして金ですが、なぜ聖書で銀が先に来るのか。その当時は銀の方が価値が高かったのか、銀が金銭として用いられることとの関係か、あるいは音韻の理由によるものか、よくわかりません。「左右」を「みぎひだり」、「東西」を「にしひがし」、「夫婦」を「めおと」などと言うのとは少し違うように思われます。

口語訳聖書は、詩編115:4を「しろがねとこがね」と原文どおりの順で訳しています。口語訳聖書は、原文が「銀と金」の場合、「金銀」と訳す場合が多くありますが、散文では「銀と金」と訳すことがあるのに対し、詩文に限って「しろがねとこがね」と訳すことがあります。それはおそらく、「^{しろがね}銀も^{くがね}金も玉も何せむに^{まさ}優れる^{たから}宝子にしかめやも」(「万葉集」山上憶良)の歌にならったのではないかと考えられます。ただ今の時代では、「しろがね」や「こがね」と訳すのには無理があるように思われますがどうでしょうか。

これを英訳万葉集では “What use to me The silver, gold and jewels? No treasure can surpass children.” と訳しています。日本語は音節の数が、五七五七七ですが、英語訳では単語の数が、四五五となっています。日本語の音節数をそのまま英語に翻訳することはできませんから、せめて単語数でときれいに配分して訳しています。

「歌をよむ」の「よむ」は元来、「数える」をあらわしていた動詞であろうとされていますが、昔は五七七と区切りをつけ声をあげて朗唱していたのでしょう。



■このページに関するお問合せは

一般財団法人 日本聖書協会 翻訳部

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1

TEL.03-3567-1989 FAX.03-3567-4436 E-mail. transl@bible.or.jp

[ページの先頭に戻る ▲](#)

[▶ご利用規約](#) [▶プライバシーの保護について](#) [▶このサイトに関するお問い合わせ](#)

1997-2021 © Japan Bible Society, Allrights reserved. 当サイトに掲載されている情報の無断転載を禁止します。

聖書を知る



- 聖書とは
- 聖書翻訳の研究
- 聖書ができるまで
- 聖書翻訳の歴史
- 口語訳、新共同訳、聖書協会共同訳 について
- 新翻訳事業について

新翻訳事業について



日本聖書協会 講演会
原文の味・訳文の味



梶 暁生氏
2015年3月6日
於・フクラシア東京ステーション

II 語数の問題

そこで次に、お話しするのは旧約聖書の原文の単語の数についてのことです。「申命記」(マソラ・テキスト)の巻末には、モーセ五書の節、章、単語、文字の数が書き記されています。おそらくこれは、申命記4章2節の「わたしがあなたがたに命じる言葉に付け加えてはならない。また減らしてはならない」とも関連することではないかと考えられますが、一字一句間違えないで伝えるためか、暗唱のためか、その他の理由かによるものか、きちんと単語の数を数えるという伝統があったものと思われる。

聖書の本文においても単語数を数えて書いている箇所があります。ただこうしたことを翻訳に反映することはなかなかできません。そうした意味で、これは翻訳の裏にある話です。

(1) 創世記1章3節-31節 (天地創造)

P. ボーシャンは、『創造と分離』(Paul Beauchamp, Cr ation et S paration.1969)という本の中で、創世記1章の6日間の創造の記事が、以下のような単語数で構成されていると分析しました。

第1日目	31語				
第2日目	38語	69語			
第3日目	69語				
第4日目	69語	138語	207語	=3 × 69	「神は言われた」=5回
第5日目	57語				「神は言われた」=5回
第6日目	149語		206語		(22節の「言われた」は別)
第1～6日	413語		413語	=7 × 59	

彼は前の4日が207語、後の2日が206語の一語違いで書かれ、それぞれ天の支配と地の統治で最後が結ばれており、どちらも「神は言われた」が5回ずつ配置され、二部に分けることができるとみえます。6日間の単語の総数が7の倍数の413語であるというのも計算されて書かれたことの証左でしょう。

ちなみに、出エジプト記25章から31章にかけては、聖なるテント(幕屋)建設の指示の記事がありますが、そこでは7回、「主はモーセに言われた/語られた」という語句が差し込まれており、最後の7回目の箇所ではちょうど7日目の安息日のことが述べられています。



■このページに関するお問合せは

一般財団法人 日本聖書協会 翻訳部

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1

TEL.03-3567-1989 FAX.03-3567-4436 E-mail. transl@bible.or.jp

[ページの先頭に戻る ▲](#)

[▶ご利用規約](#) [▶プライバシーの保護について](#) [▶このサイトに関するお問い合わせ](#)

1997-2021 © Japan Bible Society, Allrights reserved. 当サイトに掲載されている情報の無断転載を禁止します。

ホーム

聖書を読む

聖書を知る

聖書のお求め

献金する

聖書協会とは

聖書図書館

ホーム > 聖書を知る > 日本聖書協会 講演会 原文の味・訳文の味 05

聖書を知る



- [聖書とは](#)
- [聖書翻訳の研究](#)
- [聖書ができるまで](#)
- [聖書翻訳の歴史](#)
- [口語訳、新共同訳、聖書協会共同訳 について](#)
- [新翻訳事業について](#)

新翻訳事業について

日本聖書協会 講演会
原文の味・訳文の味



柘 暁生氏

2015年3月6日

於・フクラシア東京ステーション

(2) 創2章4節後半-9節 (人間の創造)

創世記2章4節後半から25節までには、それ以前(1章1節~2章4節前半)の7日間の天地創造の物語とは異なる、また別の天地創造の物語があります。四つの川の記事の前までは、人間の創造が中心の物語です。

- A 4節b 主なる神が、地と天を造られたとき、
地にはまだ野の木も、野の草も生えていなかった。
- B 5節 主なる神が、地の上に雨を降らせず、
土を耕す人もいなかったからである。
- C 6節 だが、地から水が湧き上がり、
土の全ての面を潤した。
- D 7節 主なる神は、土の塵で人を形づくり、
C' 7節 その鼻に命の息を吹き込まれ、
人は生きる者となった。
- B' 8節 主なる神は、東の方のエデンに園を設け、
そこに形づくった人を置かれた。
- A' 9節 主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いあらゆる木、
園の中央に生命の木、善悪の知識の木を土から生えさせられた。

おそらくこれは集中化構造という、これまた聖書によく見られる文芸的な技法で書かれていると考えられますが、単語の数を数えてみますと、その総数は85語となります。これは42語(7×6)+1語+42語(7×6)で、真中の1語は「人」(アダム)です。これが4節後半から9節の物語の中心となる単語です。第一の創造物語では人間の創造は6日目の最後に頂点としてあったのですが、第二の創造物語では人

間の創造が最初に中心としてあります。またここでは重要な単語、人(アダム)が4回、土(アダマ)が4回、地(エレッツ)が4回、そして主なる神が5回配置されています。



■このページに関するお問合せは

一般財団法人 日本聖書協会 翻訳部

〒 104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1

TEL.03-3567-1989 FAX.03-3567-4436 E-mail. transl@bible.or.jp

[ページの先頭に戻る ▲](#)

[▶ご利用規約](#) [▶プライバシーの保護について](#) [▶このサイトに関するお問い合わせ](#)

1997-2021 © Japan Bible Society, Allrights reserved. 当サイトに掲載されている情報の無断転載を禁止します。

聖書を知る



- [聖書とは](#)
- [聖書翻訳の研究](#)
- [聖書ができるまで](#)
- [聖書翻訳の歴史](#)
- [口語訳、新共同訳、聖書協会共同訳 について](#)
- [新翻訳事業について](#)

新翻訳事業について



日本聖書協会 講演会
原文の味・訳文の味



梶 暁生氏
2015年3月6日
於・フクラシア東京ステーション

(3) 創2章10節-14節 (四つの川)

創世記2章10節から14節にかけて、エデンの園から分かれ出る四つの川の記事があります。

11節	第一の川	ピシヨーン(アラビア・エジプト?)	12語	
12節			+8語	= 20語 ↓
13節	第二の川	ギホーン(エチオピア?)		10語 ↓
14節	第三の川	ヒデケル(チグリス)		8語 ↓
	第四の川	ユーフラテス		4語 ↓

第一の川の単語数は20語で、第二の川はその半分の10語です。第三の川の単語数は8語で、第四の川はその半分の4語です。単語の総数は7×6の42語となりますが、20語から10語、8語から4語とだんだんに語数が減ってきています。第1の川(エジプト近辺?)と第2の川(エチオピア近辺?)がどこかは明白ではありませんが、イスラエルの南西の方角あたりだとすれば、第3の川(チグリス川)と第4の川(ユーフラテス川)は北東にあたり、近隣周辺の全地域をあらわしているということになります。

III 語彙の問題

多くの意味をもつ多義的な原語はどのように訳したらよいのでしょうか。翻訳する場合は多くの意味を並べたててのわけにはゆきません。どれか一つを選んで訳さなければなりません。

(1) 男と女 (創世記2章24節)

「こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。」(新共同訳)
 「それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである。」(口語訳)

ヘブライ語のイシュという単語は、男、夫、人などの、イッシャーは女、妻、雌などの意味を持っています。ですから原文では同じ単語であっても、翻訳によっては異なってくるということがあります。

2章23節ではすでに「イシュからイッシャー」(男/夫から女/妻)という語呂合わせがあります。24節はそれを受け、男と女が結ばれて夫と妻になる話です。

はじめに、「アダマからアダム」(厳密には「土からの塵で人」7節)が形づくられたと述べられており、人には男と女がいますので、おそらく23節の「イシュからイッシャー」は「男から女」を言い表しているのではないかと思います。ところが24節で、まだ一人の男と一人の女しかいない状況で、唐突に「父と母」が出てきます。これは男が父母から独立して女と結ばれ、「夫と妻」になる話をするためであると考えられます。

それゆえここでの「イシュとイッシャー」は、「夫と妻」の関係をあらわすために述べられているとみてよいと思われます。ただ、それをどのように翻訳するかは難しい問題です。多くの場合、イッシャーに関しては、妻と訳するのがほとんどですが、イシュに関しては、男と訳すほうがほとんどです。

(2) 弓と虹 (創世記9章13節)

「わたしは雲の中にわたしの虹を置く。」(新共同訳)

“I have set my bow in the clouds,” (NRSV)

洪水物語の中で、洪水後、神はもう二度と洪水はおこさないとノアと契約を立て、そのしるしとして雲の中に虹を置くと言われます。

新共同訳聖書の虹という訳語は、ヘブライ語のケシュトを訳したのですが、この語は元来は弓をあらわしています。雲の中にあるということで、それが虹であると見てよいでしょう。ただ、多くの諸外国語訳はそのまま弓と訳しています。外国語で虹は、Rainbow (英語)、Regenbogen (独語)、Arc-en-ciel (仏語)など、雨あるいは空と弓との組み合わせで虹をあらわしていますので、その理解は困難ではありません。

日本語では、漢字の虹—これは天空にいる龍または蛇が雨を降らすことと関係しています—が使われ、弓との関連はありません。むしろ日本では、弓張り月、白真弓というように、弓は月との関連でイメージされます。虹も月もどちらも天空に出るものではありません。

ただここではやはり、弓の意味が大きく、弓が戦争の武器であることから、神がそれを取り上げて戦争のしるしを平和のしるしとした、もう決して弓は使わない、あるいは神が弓をもって見張っているなどの意味が考えられます。いずれにせよ、洪水後、弓の意味が変わったということで、洪水以前と洪水以後の状況変化を端的に弓があらわしています。ですから「虹」と訳出しただけでは、「弓」のもつ意味が日本語では出てきません。こうしたことは「本文注」で「原語は弓」となどと注記すれば、より深い理解につながるものと思われます。



■このページに関するお問合せは

一般財団法人 日本聖書協会 翻訳部

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1

TEL.03-3567-1989 FAX.03-3567-4436 E-mail. transl@bible.or.jp

[ページの先頭に戻る ▲](#)

[▶ご利用規約](#) [▶プライバシーの保護について](#) [▶このサイトに関するお問い合わせ](#)

ホーム

聖書を読む

聖書を知る

聖書のお求め

献金する

聖書協会とは

聖書図書館

ホーム > 聖書を知る > 日本聖書協会 講演会 原文の味・訳文の味 07

聖書を知る



- [聖書とは](#)
- [聖書翻訳の研究](#)
- [聖書ができるまで](#)
- [聖書翻訳の歴史](#)
- [口語訳、新共同訳、聖書協会共同訳 について](#)
- [新翻訳事業について](#)

新翻訳事業について

日本聖書協会 講演会 原文の味・訳文の味



梶 暁生氏

2015年3月6日

於・フクラシア東京ステーション

(3) 唇と言葉 (創世記11章1節)

「世界中は同じ言葉(唇)を使って、同じように話していた(ダバル)」(新共同訳)

「全地は同じ発音(唇)、同じ言葉(ダバル)であった。」(口語訳)

バベルの塔の物語はたった9節の短い記事ですが、ご存じのように言葉が通じなくなって塔の建設が中断されるという有名な話です。この物語の中では、^{キーワード}鍵言葉である唇/言葉、全地、そこ、主などの語句がそれぞれ5回ずつ出てきます。

旧約聖書の中で言葉をあらかず代表的なヘブライ語はダバルという単語で、これは「こと」と「ことば」の両方をあらかず、日本語の「こと」と「ことば」が関連するのによく似ています。しかしながら、バベルの塔で混乱させられる(ババル)のはこのダバルという単語ではなく、元来は唇を意味するサファーという単語です。サファーは唇、言語、端などを、ダバルは言、事、話などを意味します。

それではなぜこの唇という単語がバベルの塔の物語の中で使われるのでしょうか。それは旧約聖書の中では、言語が不明瞭で通じない、よくわからずに不可解である場合において、この単語が用いられるからです。バベルの塔の物語はまさに言語が通じず、建設が中断される話ですから、そのために唇の語が用いられているわけです。

たとえば、エゼキエル書3章5-6節では唇が不可解な言葉として、舌が難しい言葉として使用されています。「まことに、あなたは、不可解な言語(唇)や難しい言葉(舌)を語る民にではなく、イスラエルの家に遣わされる。あなたは聞き取ることができない不可解な言語(唇)や難しい言葉(舌)を語る多くの民に遣わされるのではない。」(新共同訳)

前のページへ

1

2

3

4

5

6

7

8

9

次のページへ

ホーム

聖書を読む

聖書を知る

聖書のお求め

献金する

聖書協会とは

聖書図書館

ホーム > 聖書を知る > 日本聖書協会 講演会 原文の味・訳文の味 08

聖書を知る



- [聖書とは](#)
- [聖書翻訳の研究](#)
- [聖書ができるまで](#)
- [聖書翻訳の歴史](#)
- [口語訳、新共同訳、聖書協会共同訳 について](#)
- [新翻訳事業について](#)

新翻訳事業について

日本聖書協会 講演会
原文の味・訳文の味



梶 暁生氏

2015年3月6日

於・フクラシア東京ステーション

IV 「本文注」：新しい聖書の特徴

新しい翻訳聖書では、聖書本文の下の脚注欄に「本文注」が付いた聖書も作成されます。たとえば、創世記2章7節を例にとりますと、以下のように本文注が記されます。

本文	主なる神は、* a土の塵で * b人を形づくり
本文注	a「へ」アダマ b「へ」アダム

本文注は主として以下のような場合に付けられます。

(A) 異本：底本から離れる場合

底本のヘブライ語(マソラ・テキスト)本文が、他のヘブライ語写本や七十人訳ギリシア語聖書などと異なり、本文を修正する、あるいはしない場合などに注を付けます。あるいはわかりやすくするために、原文にない語や句を付け加える場合です。創世記4章8節の例。

「カインが弟アベルに言葉をかけ、二人が野原に着いたとき」(新共同訳)

「カインは弟アベルに言った、『さあ、野原へ行こう』。彼らが野にいたとき」(口語訳)

「さあ、野原へ行こう」という言葉は、七十人訳ギリシア語聖書にあるもので、底本のヘブライ語聖書にはありません。動詞「言う」のあとに、何の言葉もないよりは、「さあ、野原へ行こう」という言葉があったほうが筋が通ることは通っています。いくつかの外国語訳でもこれを取り入れているのがあり、口語訳聖書もそうしていますが、新共同訳聖書は底本にしたがっています。こうした場合、「本文注」に説明がありますと、違う翻訳に出会ったとき、これは誤訳ではないかなどの困惑が避けられます。

(B) 別訳：底本通りの訳でも、いくつか重要な訳がある場合

出エジプト記15章8節には、葦の海でイスラエルの民のあとを追ってきたエジプト軍を、主なる神が海の藻屑とされた後、モーセがそれを感謝して歌う海の歌の中に次ような文言があります。

「憤りの風によって、水はせき止められ、」(新共同訳)

「あなたの鼻の息で、水は積み上げられ、」(口語訳)

一方は「憤りの風」であるのに対し、他方は「鼻の息」と訳されています。同じ原文がこのように異なって訳されるのは、原語の持つ意味の解釈によるものです。鼻あるいは憤りと訳された単語は、ヘブライ語でアフと言ひ、鼻、顔、憤りなどの意味を持っています。日本語で「憤り」というのは、息がつまる、思いが胸につかえるということから、怒り、腹を立てる意味になっていったと考えられますが、ヘブライ語では、怒りの時の鼻息の荒さ、あるいは顔の形相から、鼻や顔が憤りの意味を持ったものと思われる。それに対し、風あるいは息と訳された単語は、ヘブライ語でルーアハと言ひ、風、息、霊などの意味を持っています。霊というのは、風や息などのように目に見えないが動き働く力と考えられます。

ですから、原文をどのように理解するかによって翻訳は異なってきます。「憤りの風」と訳するのは、神のエジプト軍に対する怒りの心情をあらわすもので、「鼻の息」と訳するのは、神の行為を擬人的にとらえて訳したものです。



■このページに関するお問合せは

一般財団法人 日本聖書協会 翻訳部

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1

TEL.03-3567-1989 FAX.03-3567-4436 E-mail. transl@bible.or.jp

[ページの先頭に戻る ▲](#)

[▶ご利用規約](#) [▶プライバシーの保護について](#) [▶このサイトに関するお問い合わせ](#)

1997-2021 © Japan Bible Society, Allrights reserved. 当サイトに掲載されている情報の無断転載を禁止します。

ホーム

聖書を読む

聖書を知る

聖書のお求め

献金する

聖書協会とは

聖書図書館

ホーム > 聖書を知る > 日本聖書協会 講演会 原文の味・訳文の味 09

聖書を知る



- [聖書とは](#)
- [聖書翻訳の研究](#)
- [聖書ができるまで](#)
- [聖書翻訳の歴史](#)
- [口語訳、新共同訳、聖書協会共同訳 について](#)
- [新翻訳事業について](#)

新翻訳事業について

日本聖書協会 講演会 原文の味・訳文の味



柘 暁生氏

2015年3月6日

於・フクラシア東京ステーション

(C) 言葉遊びなど：ヘブライ語のカタカナ表記

旧約聖書では、特に人名や地名の語源に関して、語呂合わせなどの言葉遊びが多く出てきます。以下は出エジプト記2章10節の例です。

「王女は彼をモーセと名付けて言った。『水の中からわたしが引き上げた(マーシャー)のですから。』」(新共同訳)

「彼女はその名をモーセと名づけて言った、『水の中からわたしが引き出したからです』」(口語訳)

口語訳聖書は本文の翻訳だけですので、そのもとになっているヘブライ語の語呂合わせがわかりませんが、新共同訳聖書は、翻訳のあとにそのヘブライ語をカッコの中に記していますのでそれがよくわかります。新しい翻訳聖書は、翻訳の本文にではなく、脚注欄の「本文注」にそれを注記して、本文をなめらかに読みやすくするように考えています。

ただ、モーセ(人名)とマーシャー(引き上げる)を語呂合わせで結びつけていますが、これは無理なこじつけです。と言いますのは、「モーセ」という名前は元来エジプト語であり、「引き上げる」という動詞はヘブライ語であり、違う外国語でもって説明しているからです。モーセの名前は、エジプトの王、ラムセス(ラーの子)やトメス(トの子)のメス「子」(ms)と関連すると言われていました。またモーセは「引き上げられる者」であり、「引き上げる者」ではありません。こうしたことは、「本文注」の域を超えていますので、注解書などを見てもらうほかはありません。

おわりに

「どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。」(使徒言行録2章8節)

使徒言行録2章には、五旬祭の日に弟子たちが聖霊に満たされ、霊が語るままに他の言葉で話し出すと、皆自分の故郷の言葉が話されているのを聞いたという記事があります。これはアンチ・バベルの塔の物語で、いろいろの言葉が話されているのを聞いても理解できたという話です。ここで大事なものは霊の働きです。

聖書の翻訳においても、「いかなるたつとききやうをも、かかれたるすびりつをもてよむべし」と「こんでむつすむん地」(「キリストにならいて」)に書かれているように、「すびりつ」(Spiritus: 霊)をもってまず第一にのぞむことが大切であり、霊に導かれてこそ書物(Bible: 聖書)に生命の息吹が宿ることでしょう。



■このページに関するお問合せは

一般財団法人 日本聖書協会 翻訳部

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1

TEL.03-3567-1989 FAX.03-3567-4436 E-mail. transl@bible.or.jp

[ページの先頭に戻る ▲](#)

[▶ご利用規約](#) [▶プライバシーの保護について](#) [▶このサイトに関するお問い合わせ](#)

1997-2021 © Japan Bible Society, Allrights reserved. 当サイトに掲載されている情報の無断転載を禁止します。